

○太田 稔, 佐藤 詔子, 根本 孝幸,
根本 優子, 客本 斉子

東山 敬貴(二戸郡歯科医師会)

岩手医大歯学部口腔生化学

〔緒言〕マウス顎下腺は、アンドロゲン依存性であり、この細胞質にはアンドロゲン・レセプター(AR)が存在する。本研究では、先ずAR量の雌雄差を調べ、ついでARに及ぼす去勢ならびに性ステロイド・ホルモンの影響について検索した。また、アンドロゲン作用の指標として用いられる N-tosyl-L-arginine methyl ester esterase (TAMEase) ならびにアンドロゲン代謝に関与する酵素の 3α -hydroxysteroid dehydrogenase (HSD) 活性についても検討した。

〔方法〕8—10週令の ddY 系マウス雌雄を用い、雄の一部については去勢を行った。また、一部の雌について testosterone (T) を体重 100 g 当り 500, また一部雌には estradiol- 17β (E_2) を体重 100 g 当り 100 μ g を、それぞれ 1—10日間投与した。頸部脱臼後、直ちに顎下腺を 50mM の Tris-HCl 緩衝液 (pH 7.5) と共にホモゲナイズし、これを 190,000xg で 30分遠心し、得た上清を細胞質として用いた。AR は、dextran coated charcoal 法により測定した。

〔結果〕(1)顎下腺細胞質 AR 量は、雌が雄より有意に高い。(2)雄の AR 量は去勢後次第に増加した。(3)T 投与を受けた雌の AR 量は T 投与日数と共に減少した。(4) E_2 の投与は雄の AR 量に変化を来さなかった。(5) TAMEase 活性は、雄で有意に高値を示した。去勢後、雄の TAMEase 活性は次第に減少し、10日後には、去勢前の 40% にまで低下した。一方、 E_2 投与により雄の活性は変化しなかった。雌では T 投与により TAMEase は上昇した。(6) HSD 活性は、雄が有意に低値を示した。去勢によりこの活性は漸次増加し、去勢10日で雌のレベルに達した。また、T 投与により雌の HSD は減少し、 E_2 投与により雄の活性は増加した。

〔結語〕マウス顎下腺の AR 量ならびに TAMEase 活性はアンドロゲンに依存して変動するが、エストロゲンには非依存性であること、さらに HSD には雌雄差があり、その活性は性ホルモン投与により変動することを認めた。

演題 4. 一戸町における小児う蝕有病状況と今後の歯科保健活動

—地元開業医の立場から—

岩手県一戸町の小児う蝕の実態を調べ、その結果から今後の歯科保健活動を探るため、昭和58年度に実施した町立保育所の幼児に対する歯科検診の結果を分析した。

町立の保育所および児童館に通う 3 歳児 99 名、4 歳児 166 名、5 歳児 205 名、計 470 名を対象とした。これは全町の 3—5 歳児の約 56% にあたる。う蝕の検診は WHO の検出基準に準拠し、演者 1 名で行った。

う蝕有病者率は 3 歳児 94%、4 歳児 98%、5 歳児 99% と全国 3 歳児 72%、4 歳児 82%、5 歳児 95% (S56 歯科疾患実態調査) に比べいずれの年齢も高い値を示している。

一人平均う蝕数は 3 歳児 7.8、4 歳児 10.8、5 歳児 11.8 と全国 3 歳児 4.3、4 歳児 6.1、5 歳児 8.2 (前述の調査) に比べ 3 歯以上の大きな差が認められる。

また、一戸町を 3 つのブロック (北、中、南部) に分けて一人平均う蝕数と処置歯率を 5 歳児についてみると、一人平均う蝕数では北部 11.9、中部 13.5、南部 10.3 であった。処置歯率は北部 11.5%、中部 7.8%、南部 22.8% (一戸町 13.9%、全国 27.7%) であった。処置歯率の差は歯科診療所までの交通の便の差が関与していると思われる。

一戸町における乳歯う蝕を減少させ処置歯率を向上させるためには、第一に現在異った機関により実施されている種々の小児を対象とした保健事業を包括する組織をつくること、第二にこれらの保健事業にかかわっている担当者の歯科保健に関する知識、技術のレベルアップを計ること、第三には検診後の受療システムの確立を計ること、以上の 3 点が求められている。

今後もこのような検診を継続的に実施し、一戸町の歯科保健事業に治療のみならず、様々な面で積極的に取り組む意向である。

演題 5. 咬合異常により顎口腔系に重篤な機能障害を呈した 1 例

○渡辺 秀宣, 深沢 太賀男, 森岡 範之,
土門 宏樹, 古川 良俊, 石橋 寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

咬合の異常が顎機能異常に関係することはよく知られているが、個体それぞれの適応性、許容性の度合に